

正誤表

	誤	正
英文要旨 i	Tetsumasa KAWAKAMI	Norimasa KAWAKAMI

辛亥革命期における国粹主義と近代史学

——日本近代との交錯の視点から——

川上 哲 正

はじめに

二〇世紀初頭の中国において改良か革命かは当代知識人の大いなる選択肢であった。彼らがそのどちらを選ぶかは、その時代認識によるのは勿論のことであるが、そうであるがゆえに中国の歴史総体に対する認識が問題とされたのはいうまでもない。改良派であれ革命派であれ、ともにその中国史総体を我が認識対象とする取組がなされたのである。それは宋学に対する批判や今文派・古文派といった学派対立を背景として、諸子研究や仏学研究といった様々な分野への研究の拡大・深化へと波及していった。そこでは当然のこととして西欧の文化的影響を媒介とした中国の文化伝統に対する自己反省を喚起せずにはおかなかった。東西の歴史・文化総体に対する取組なしに中国は自らの歴史を創造することはできなかったのである。

既に筆者は「柳亜子と国粹・民族主義⁽¹⁾」において、辛亥革命期における若き革命派知識人柳亜子が愛国学社・中国教育会、後には国学保存会・国粹学社に加入することによって国粹主義的観点から中国史、とりわけ明清史への認識を深めたことを考察した。そこでは柳亜子が漢民族の歴史伝統を喚起するために国粹主義の立場から反満の歴史を描出し、南明史に入っていった事実、また、その歴史認識において単なる反満のみならず、反帝国主義の側面も出てきていることを指摘したが、充分に国粹的傾向をもった革命派知識人の歴史意識・歴史認識を取り上げることができなかった。それゆえ、ここでは辛亥革命期の国粹主義的傾向をもった知識人の歴史意識・歴史認識の問題を取り上げてみたい。そのために、彼らの問題を梁啓超らによる中国の近代史学の新展開と絡ませ、且つ、日本の近代史学や国粹主義と交錯させつつ、国粹主義的傾向をもった知識人の歴史意識・歴史認識を中心の対象とした。

一 中国における近代史学の新展開

中国の近代史学はいつどのようにして成立したのであろうか。中国では近代史学をブルジョア史学と総括し、龔自珍・魏源らをその先駆としている。彼らは公羊学の三世説を援用しつつ歴史の変化を必然とみなした。次いで嚴復・康有為・更に梁啓超に至って西欧の近代史学の導入による本格的な中国の近代史学が形成され、その継承・発展者として更に章炳麟や夏曾佑・王国維といった人々をあげる。その後、辛亥革命後には康有為らが中心となって始めた孔子教や袁世凱の復辟運動などの影響によって増幅された復古思潮が流行したりしたが、梁啓超以降の新たな展開こそが唯物史観導入以前の近代史学の基本線となった、とする⁽²⁾。

梁啓超は康有為の弟子としてその学説に依拠しつつ、歴史変化の学説を受容した。既に一九世紀末年の頃には梁

啓超は嚴復・徐仁鏞・羅振玉らとともに伝統史学を批判する論考を発表していた。彼は一八九七年に書いた「続訳列国歳計政要叙」(『時務報』第三三冊)において封建的「君史」に反対して西欧の近代史学に習って「国史」「民史」を主張し、新史学の創造こそ中国の改造に繋がるものとみなした。その後、日本滞在期間に大いに当時の日本で常識となっていた進化論や地理環境決定論などの影響を受け、一九〇一年の「中国史叙論」(『清議報』第九〇冊・第九一冊)、翌年の「新史学」(『新民叢報』第一号・第三号・第一一号・第一三三号・第一六号・第二〇号)によって「史界革命」を主張した。

「中国史叙論」の「史の界説」では、「史とは人間過去の事実を記述するものなり」として、「近世史家は必ず其の事実の關係と其の原因結果を説明する」ものであり、「必ず人間全体の運動進歩、即ち国民全部の経歴及び其の相互の關係を探索する」ものであるとしている。従来の史学が「事実を記載するに過ぎず」「一人一家の譜牒に過ぎないことを批判する。そうして、以下、「中国史の範圍」「中国史の命名」「地勢」「人種」「紀年」「史以前の時代」「時代の区分」を取り上げてゆく。

更に「新史学」では、「第一章 中国の旧史学」の冒頭に「今日、泰西に通行する諸学科中において中国の固有とするところを為すは唯だ史学のみ。史学は学問の最も博大にして切要なるものなり。国民の明鏡なり。愛国心の源泉なり。今日欧州民族主義の發達する所以、列国の日進文明する所以は史学の功、其の半に居る」と述べている。唯一中国が誇れるものとして史学をあげ、史学をあらゆる学問の総合するものとして捉え、しかも、愛国主義を支えるものとみなす。しかしながら、彼にとって「旧史学」には「四弊」があり、一は「朝廷有るを知りて国家有るを知らず」、二は「個人有るを知りて群体有るを知らず」、三は「陳迹有るを知りて今務有るを知らず」、四は「事實有るを知りて理想有るを知らず」、更に「二病」として、一は「鋪叙を能くして別裁を能くせず」、二は「因襲を

能くして創作を能くせず」とする。そして、この章の最後に「今日民族主義を提唱し、我が四万万同胞の此の優勝劣敗の世界に強立せ使めんとするや、則ち本国史学一科実に老無く幼無く男無く女無く智無く愚無く賢無く不肖無くて皆まさに従事すべき所為りて、之を視るに渴飲飢食の如く、一刻として容緩せざるなり」とする。ここに民族主義的立場から史学的重要性を説くのである。その場合、この民族主義とは漢民族主義ではなく、まさに列強によって圧迫されている中国の現状を踏まえての立場なのである。「第二章 史学の界説」では、「新史学を創らんと欲するならば、先ず史学の界説を明らかにせざるべからず。史学の界説を知らんと欲するならば、先ず歴史の範囲を明らかにせざるべからず」と述べ、史学の定義・対象を明らかにする。即ち、歴史とは先ず「進化の現象を叙述するものなり」「人群進化の現象を叙述するものなり」「人群進化の現象を叙述し、其の公理公例を求得するものなり」とする。また、「歴史の範囲」とは「凡百の事物、生長有り、発達有り、進歩有る者は則ち歴史の範囲に属する」とする。つまり、彼は歴史学の世界が対象とすべきものは人類の進歩発展の現象であり、その原理をうちたてるべきであるとしたのである。

かくて、梁啓超においては新しい史学は進化論を中心的理念として「人群進化と歴史事件の因果関係を追求して人類社会の発展の規律を提示しようとする」ことにあるとした。梁啓超は進化論をもつて歴史の発展を推し量ろうとしたばかりでなく、当時流行していた地理環境決定論をも援用しつつ歴史の解釈を行い、「新史学」を構築したのである。

二 日本の近代史学と中国の近代史学の交錯

長く日本史学は中国の影響を受けつつ展開していたのであったが、明治以降の啓蒙期になると西洋史学の影響が入って日本の近代史学が成立する。中国でもアヘン戦争以降は民族意識に根ざした近代史学が開始された。日清戦争以後になると、明確に日本の近代史学が中国に影響を与えることとなった。

日本の近代史学では明治維新前の文久年間に洋書調所を中心として西周・津田真道らによって西洋哲学が導入され、法学・政治学・統計学といった社会科学が導入されたが、西らが導入した哲学とはコントの実証主義であった。それが明治一〇年前後に至ると「社会学的史学⁽³⁾の方向」に向かい、更にギゾー (E. P. G. Guizot 1787-1874)・バツクル (H. T. Buckle 1821-1862) に代表される文明史の視点も導入され、ジャーナリズムの世界で大いに影響力をもったのである。例えば、バツクルの『英国開化史』が大島貞益によって翻訳されたのは一八七五年のことである。当時の日本においては文明史観は「文明と野蛮、平和と戦争の強烈な対比⁽⁴⁾」の書であり、「社会の発展と人間の意識形態の変化との関連こそが歴史叙述に値するもの⁽⁵⁾」と考えられていたのである。ここでは歴史学は社会学に包摂されつつ展開し、「個々の史実の考証を主とする考証史学より社会の発展を解明しようとする史論⁽⁶⁾」が特色であった。しかも、スペンサー (H. Spencer 1820-1903) の社会進化論を祖述した有賀長雄は一八八六年の『増補社会進化論』で「社会学ハ愛国心を振起するの方策として緊要なり」とし、「偏狭な観念的愛国論を排して、原因結果の理法に基づいた歴史の学びによる愛国心を主張⁽⁷⁾」したという。しかし、こうした文明史観がそのまま日本の近代史学の発展を担ったわけではない。

一方、一八七五年より明治維新政府の主導する漢学系の修史局 (後、一八七七年以降は修史館) が「大日本編年史」の執筆にかかり、西洋史学を批判的に学びつつ日本史の構築を模索した。そこで咀嚼された西洋史学とは中村正直・嵯峨正作が翻訳したゼルフィー (G. G. Zeffii 1820-92) の「The Science of History」であり、日本では公

刊されずじまいに終わったが、ドイツ史学の学問的価値を高く評価したものであった、という。修史局で展開した考証史学は漢学系の歴史家に独占されていたからこれに対抗したのが、国学・国文系の歴史家である。彼らは明治二〇年代の国粹主義の台頭と相俟って宮内省をうしろだてとして国体史観を掲げ、こうした傾向性の中から社会進化論や反体制的革命運動への批判、民族主義的観点を強調した。その傾向は一八九二年の久米邦武事件を契機として「文明史観と史誌編纂事業をも廃止に追い込⁸⁾ん」でゆき、一八九三年の史編纂掛の廃止によって漢文による「大日本編年史」修史事業が終わったのである。それは「日本近代史学の挫折⁹⁾」というべきものであったろう。

しかし、既に一八八七年にリース (J. Ries 1861-1928) がドイツから招聘されて文科大学に史学科が創設されてからは本格的にドイツ史学が導入されていた。一八九四年には渋江保訳によるヘーゲル (G. W. F. Hegel 1770-1831) の「歴史研究法」が翻訳されたりして、その歴史哲学も知られるようになった。その後、一九〇三年に出版された坪井九馬三の『史学研究法』が西洋史学の方法論の指導書として広く読まれるようになり、同時に国史研究にも大きな影響を与えた。一方、史料編纂事業自体は一八九五年の史料編纂掛の設置によって復活したが、「事実でないことを事実ではないと社会的に断言することも、通史叙述のありかたを検討・論議することもタブー視⁹⁾され」る気風がそこには展開したこともまた事実であった。

西欧の近代史学がアヘン戦争後の中国に入ってきたのは、宣教師らの資料を介しての魏源の『海国図志』あたりからといわれる。その後、洋務運動期には王韜の『重訂法国志略』、黄遵憲の『日本国志』が国情・民情を書いて伝統史学の方法とは異なる歴史叙述を始めたが、それらは未だ西欧近代史学の体系的伝播とは程遠いものであった。二〇世紀初頭になると、例えば、周維翰『西史綱目』(一九〇三年刊) では中国書のみならず、日本書の翻訳などが掲載され、近代科学や歴史学が紹介されたが、それらは史書編纂の体裁や近代史学の観点が僅かに見られるにす

ぎなかったといわれる。それでも、一九世紀末から体系的に西欧史学が伝播してきたわけであって、そこではコント (A. Comte 1798-1857) の社会学、スペンサーの社会進化論の影響が強烈であつた。それは徹底・康有為らの著作に如実にあらわれている。こうした方向は西欧の史学理論そのものへの体系的受容へと展開するのである。

梁啓超の「新史学」にあらわれた史学理論は日本經由で伝えられた。一八七七年に出版された永峰秀樹訳のギゾーの『欧州文明史』は一九〇〇年に『訳書彙編』第二期に訳載され、一九〇二年に梁啓超が『新民叢報』第一一号の「東籍月旦」に紹介した。「中国広東青年」の訳で出版された杉山藤次郎編「泰西政治学者列伝」の翻訳本にはギゾーを「史理学の嚆矢」として取り上げ、バックルの伝記も翻訳されて「若しも其の議論の高下優劣を比較すれば、則ち又同日にして論ずるには非ず、邁克尔応に処するに高度を以てすべく、基率尔応に処するに低度を以てすべし」と評価されている。翌年には一八七八年に出版された田口卯吉訳のバックルの『英国文明史』の部分訳も南洋公学訳書院から出版され、一九〇六年から一九〇七年にかけての『学部官報』に魏易節の部分訳も掲載されたりした。⁽¹⁰⁾ また、一九〇二年に汪榮宝は早稲田大学での坪井九馬三の講義を「史学概論」と題して『訳書彙編』に紹介した。浮田和民の『史学原論』も侯士縮訳で一九〇三年に出版された。そこではスペンサーを紹介して社会学の必要が説かれている。一九〇三年に出版された坪井九馬三の『史学研究法』は、彼自身の言葉に従うならば、イギリスのフリーマン (E. A. Freeman 1823-1892)、ドイツのベルンハイム (E. Bernheim 1856-1942)、フランスのサイゴノボス (C. Seignobos 1854-1942) の影響下にあつたわけであり、こうしてコント以降の実証主義が影響を与えることとなり、また、ランケ (L. von Ranke 1795-1886) ら、ドイツ史学の諸学派も導入された。とりわけ、ドイツ史学の民族主義的傾向は中国人の民族主義と共鳴するところがあつたようで、例えば、一九〇三年に書かれた劉成禺の「歴史広義内篇・人種第一」(『湖北学生界』第一期) や一九〇五年に黄節が書いた「黄史・総序」(『国粹学

報』第一期)には漢民族主義的傾向性が表出している。更に日本の文明史観とも言うべき人々の影響もあった。ギゾー・バツクル・スベンサーら一連の理論の影響を受けた田口卯吉や福沢諭吉らの著作が大いに読まれ、とりわけ田口の『日本開化小史』『支那開化小史』や福沢の『文明論之概略』などは大いに評価され、翻訳されたのである。

竹内弘行は梁啓超の「新史学」や「中国専制政体進化史論」(『新民叢報』第八・九・一七・四九号)について天野為之の『万国歴史』にある内容と一致している、とする。これは一八八七年に中学校・師範学校用の教科書として出版されたものであり、その内容は「天野説が拠て立つ西洋史家の独善を批判し、自から『万国歴史』の著述に志したと「東籍月旦」ではいいながら、結局は天野らの民族進化論的万国史を全面肯定した上で「新史学」の筆をとっていた」ということになる。また、田口卯吉の『支那開化小史』『日本開化小史』の二著は「従来の編年体や記事体の歴史叙述に代えて、歴史の進化を基に、その原因結果を論断する史論体を提唱し、日本史学界最初の体系的文明史」⁽¹²⁾を著したものであつて、これらにも影響を受けたとしている。

松尾洋二「梁啓超と史伝」⁽¹³⁾でも、「中国史叙論」では桑原鷗蔵『中等東洋史』(一八九八年出版)に依拠して、一、上世史、「中国の中国」(黄帝から秦の統一)二、「アジアの中国」(秦の統一から清代の乾隆末年)三、近世史、「世界の中国」の三期に分けていると指摘する。また「堯舜为中国中央君権濫觴考」でも、白河次郎・国府種徳『支那文明史』(一九〇〇年出版)に依拠して、一、黄帝以前、野蛮自由時代 二、黄帝から秦の始皇帝まで、貴族帝政時代 三、秦の始皇帝から清の乾隆帝まで、君権極盛時代 四、清の乾隆帝から現在、文明自由時代の四期に分けていると指摘する。このような事例により、いかに梁啓超が日本の近代史学に即時的な反応を示したかが了解される。

同じように日本を媒介としながら西欧の歴史理論を吸収した革命派の人物が書いた歴史論は多いが、例えば陶成

章が一九〇四年に『警鐘日報』（七月一四日号）に「叙例」を書いて、後に出版した『中国民族権力消長史』を取り上げて、梁啓超の歴史観と比較してみよう。その「叙例 八則」では、一、「中国は中国人の中国」であり、「中国人」とは「漢人」であると明記する。それゆえ、「中国の歴史は漢人の歴史なり。叙事は漢人を以て主と為し、其の他の諸族の漢族に与かり、関係有る者は付入す」とする。二、「中国の歴史は漢族統治の歴史なり、一人の家譜に非ず」として、「故に叙事は専ら民族の盛衰の原因を叙し、一人の事は多く従りて略す」とする。三、「中国史を読みて中国の地位を知るべし」として、殷周以前、秦漢以降、六十年來の三期に区分する。四、「中国史を読みて中国の人文を知るべし」として、「我が中国は世界文明の一大祖国、その文化の發達は皇古に紹基し、唐・虞に葱隆し、周季に盛んとなり、漢、唐に光耀す」とする。五、「中国史を読みて中国の地理を知らざるべからず」とする。六、「中国史を読みてまさに中国歴史上包含する所の人種を悉にし、然る後に何種人種が何時中国与交際するやを知り、何種人種が何時中国与争戦し、何種人種が中国累世の大仇敵為るか、何種人種が中国与夙怨有るや、皆知らざるべからず」とする。七、「中国民族史を読みてまさに時代を区分すべし。中国の古代史家は朝代を以て時代と為し、時勢の変更に因りて時代と為さず」とする。八、「文化は国の因素、政治は国の枢機なり。其の良否美悪は皆種族盛衰と莫大なる関係有り、故に政治、文化は皆毎時代、或いは毎時期の末を詳列す」とする。この書を梁啓超は高く評価し、蔣観雲への手紙に「渙公堅苦刻厲して、今の墨子なり」と述べてもいる。陶成章は歴史家の任務として「祖先創拓の豊功」を讀え、「中世近世異族に陵せられ、異族に迫られし奇禍惨況」に問いを発し、帝国主義によって蹂躪されている中国が「我が族と此土を争い、要港削られ、路奪われ、我が同胞行きて且に餓殍と為り、我が祖先且に餒鬼と爲る」状況を明らかにしようとした。兪旦初『愛國主義与中国近代史学』では「資産階級革命派と資産階級改良派は反帝救亡、民族独立を争うことにおいて、祖国の光榮ある歴史文化伝統を維護する

ことで相通じあっていた」と陶成章と梁啓超の相互関係に着目した。しかしながら、陶成章にとって中国史とは漢民族の歴史そのものにほかならず、「光荣ある歴史文化伝統」という一般化では無論なかった。満州王朝否定を踏み止まった改良派の文化主義とは明確に異なり、漢民族主義的なところが明確に提出されていたのである。

三 中国における国粹主義の成立と史学思想

中国の史学史研究では二〇世紀初年と辛亥革命期の史学を分け、つまりは、梁啓超の史学と章炳麟の史学とをはずきりと峻別し、前者はブルジョア階級の史学の導入者であり、後者は国粹主義の史学の指導者である、とする。⁽¹⁵⁾

辛亥革命期における知識人の史学を巡る交錯という視点に立つならば、梁啓超の提唱に呼応するものには、確かに章炳麟が相応しい。章炳麟は既に一九〇〇年に中国通史を企画し、一九〇二年旧六月には梁啓超に手紙を送り、通史の必要を説いていた。即ち、「通史に貴ぶ所は因りて二方面有り。一方は社会政治の進化衰微の原理を發明するを以て主と爲し、則ち典志に之を見る。一方は民氣鼓舞し方來を啓導するを以て主と爲し、則ち亦も必ず紀伝に之を見る」⁽¹⁶⁾としてゐる。章炳麟の企画した「中国通史」がどのようなものであったかは、『楹書』『哀清史』の付録に「中国通史略例」と「中国通史目錄」があり、彼の意図が読み取れる。「中国は秦漢以降、史籍繁たり。紀伝表志は史遷に肇まり、編年は荀悦に建ち、紀事本末は袁枢に作る。皆具体の記述にして抽象の原論に非ず」(「中国通史略例」として、中国の歴史叙述に歴史の具体的記述があるだけで、歴史法則への展望がないことを指摘する。新しい史学のありかたを提示して、「哲理を鎔冶し、以て逐末の陋を祛く」(同上)と述べて、歴史が進歩してゆくものであることを提示すべき、とする。中国に時代区分がないことを指摘して「西方の史を作ることを、多く時代を

分かつ。中国は則ち惟だ書志を貴と為し、事類を分析するも時代を以て封面せず」(同上)とする。しかしながら、彼は中国の正史を完全に否定したわけではなかった。また、「中国通史目録」では「洪秀全考紀」を取り上げて、歴代の皇帝と比較し、「洪王の三七の際に起ち、旗を金田に建て、南都に入定し、籍を握図すること十二年、旌旄至る所、訊を執り丑を獲り、十有六省、功就かざると雖も亦明祖に雁行す」と述べて、その先駆性を評価した。義和団に関しても肯定的評価を行ったが、「扶清滅洋」に言及し、その「扶清」は否定した。

柳亜子が一九〇三年夏に書き上げ、『夏報』に掲載された「中国滅亡小史」はこうした章炳麟の中国史像に啓発されつつ書かれたものであった。それ以前の一九〇二年には『新民叢報』に書かれた梁啓超の人物伝に啓発されつつ「鄭成功伝」を書いた柳亜子であったが、そこから脱却して亡国の觀念によつて我が祖国を救おうと考え、「吾の我が祖国の亡ぶを痛むは史の之と与に偕亡び、抑も史且に国に先んじて亡びん」ことを嘆くのである。

さて、「国粹主義」なる言葉は日本から伝播した言葉であった。一八八八年、日本の三宅雪嶺らが政教社を創始して国粹主義を提唱したことに由来するが、章炳麟らの国粹主義はこの日本の精神的変革運動たる国粹主義とも連動し、中国における独自の国粹主義を展開した。既に一八九八年、梁啓超は『清議報』の「叙例」で「東亜の學術を發明し、以て亜粹を保存す」と述べて、日本の「国粹」を中国に導入したのであるが、彼においては同時にそれに対する批判が意識化されたのである。即ち、一九〇二年四月、梁啓超は康有為への手紙の中で、日本の「国粹」が欧化の進んだ今日においては意義があるとしたが、八月、黄遵憲との手紙のやりとりを通して中国では「国粹」を時期尚早とみなし、新學の摂取こそ優先すべきであるとの黄遵憲の考えに従っている。梁啓超は日本の「国粹」のストレートな中国への摂取を否定したのである。また、一九〇七年に張之洞が湖北經心書院を存古學堂と改名した際に「創立存古學堂折」(『奏議六八』「張之洞全集」第三冊)で「此に微臣区区として国粹を保存するの苦心、

或いは世に教えること裨益無からず」とした事例があるが、これは保守派としての反応である。一方、革命派の人々においては、即ち、一九〇二年に黄節が『政芸通報』に「国粹保存主義」（『光緒壬寅（廿八年）政芸叢書』）を発表して「夫れ国粹は国家特別の精神なり。昔、日本維新の欧化主義、浩浩として滔天し、乃ち万流澎湃の中、忽ち一大反動力を生じ、則ち国粹保存主義なり」と述べている。こうして、国粹主義が中国に流入し、国粹派ともいえる思想集団が成立したのである。しかし、それは日本の国粹主義の短絡的な輸入ではないのであって、鄭師渠「簡論晚清国粹派的偏起」⁽¹⁾では、国粹主義の出現を（一）民族的危機に対する独特な思考（二）欧州浪漫主義の影響を受ける。（三）晚清今古文争の激動（四）日本国粹主義思潮の影響を受ける、と四点にわたって指摘する。ここでは必ずしも日本の国粹主義だけをその要因にあげているわけではない。つまり、中国には中国の国粹主義が成立する土壌が醸成されていたというのである。

この後、「国粹」は排滿主義と絡みながら広がっていった。一九〇三年の冬には『政芸通報』の「乙巳年之政芸通報廣告」に鄭実が国粹主義を提唱し、更に一九〇四年、黄節が『政芸通報』（一九〇四年第一号）に「国粹学社発起辞」を発表して「日本の国粹を言うは政論を争うに与かり、吾国の国粹を言うは科学を争うに与かる」として中国独自の国粹論の展開を提示した。一九〇五年初めには上海に国粹保存会が成立し、国粹保存会の機関紙として『国粹学報』が創刊されたのである。『国粹学報』第二五・三二期の「會員姓氏録」によれば、その正式会員は一九〇六年で一九人、一九〇七年で二一人を数えたという。一九〇六年六月には章炳麟が出獄し、東京で出版された『民報』でも国粹を論じ、民報社内に国学振起社を併設したりして、大いにその思潮は拡大したのである。

「国粹」は革命派の知識人によって独自の展開をみた概念である。鄭師渠は、「国粹」を定義して次の三点を摘出する。（一）広義には中国の歴史・文化を指す。（二）中国文化の精華を指す。（三）中国文化の民族精神と特性を

指す、とする。⁽¹⁸⁾ (一)の「中国の歴史・文化」とは章炳麟が「一は語言文字、二は典章制度、三は人物事迹」(『東京留学生歡迎会演說辭』『章太炎政論選集』上)と述べていることから了解される、とする。(二)の「中国文化の精華」とは黄節が「国体に発現し、国界に輸入し、国民の原質に蘊蔵し、一種の独立の思想を具ふるものが国粹なり」(『国粹保存主義』)と述べていることから了解される、とする。(三)の「中国文化の精神と特性」とは鄧実が「夫れ一国の立つや必ず其の自立する所以の精神有り」(『鷄鳴風雨樓独立書』『光緒癸卯(廿九年)政芸叢書』)と述べていることから了解される、とする。鄭師渠の見解では、漢民族主義的な側面が強調されているわけではないが、佐藤豊のいうように、「国粹」が「漢民族の文化的精神的遺産を意味し、民族精神を養成するため、それを愛惜する具体的対象として提出されたもの」⁽¹⁹⁾であり、「国粹」は漢民族にとつての中国の歴史・文化そのものにほかなるまい。

「国粹」と同時に提起されたのが「国学」である。以下、鄭師渠『晚清国粹派』に依拠しつつ検討してみよう。鄭師渠によるならば、「国学保存論」(『政芸通報』一九〇四年第三号)を著して「国学」を提起した鄧実は、この概念が元来『礼記』の「国有学」では国家が創設した学校を意味した言葉であるが、この概念も日本からの輸入概念であり、そのみならず、秦による専制国家成立以前、異民族による支配以前の漢族の學術を指す、とした。そして、中国が異民族によって国も学も失われ、国の国ならず、学の学ならざること久しい状況にあつて「保国保学」こそが求められねばならないとした、とみなす。この面から見るとならば、「国粹」を保存することと「国学」の保存は同義であり、政治的側面における排滿革命の理論に対応するものにほかならなかった。鄭師渠は「国学」について、ふたつの文化的観点を指摘している。即ち、(一)スペンサー流の「文化有機機」論、ないしは「文化決定」論とも呼ぶべきものがあること、彼らが文化を「人群進化と同様に發展する生命有機機」と見なした点。(二)

「国学、君学対立」論と見なして、広義には中国文化の脊梁であり、狭義には「国学」保存が「国粹」保存の前提と見なした点を指摘する。これによって「国粹」と「国学」が相互補充の関係にあることを摘出したのである。更に、鄭師渠は「国魂」にも言及し、飛生の「国魂篇」（『浙江潮』一九〇三年第一期）と金一の「国民新靈魂」（『江蘇』一九〇三年第五期）を取り上げる。前者では「国魂」の陶鑄とは国粹主義と世界主義の調和を説くものであり、後者では「吾が固有を合して他国の粹を兼采する者」と説くものである、とする。とりわけ金一は「国民新靈魂」の中で、「国魂」・「国学」・「国粹」を調和的に融合させることに意を注いだが、民族主義に基き、「国学」を主体として中国と外国の文化的精華を融合させ、民族精神を鼓舞して中国を強国化することを求めた、とする。以上によって、鄭師渠は「国粹」「国学」「国魂」の三者が相互に補充しあい、二〇世紀初頭における国粹主義的学問論を形成したとするが、首肯すべき議論である。

以上の議論を踏まえるならば、中国の国粹主義における「国粹」の具体化としての「国学」の内実は史学にはかならなかった。彼らは様々な学問を探究したのであるが、とりわけ史学が彼ら国粹主義者の中心的問題であった。例えば、章炳麟は「印度人之論国粹」（『民報』一九〇八年第二〇号）で、「国粹は歴史をもつて主と為す」として「国粹」の基本に歴史を学ぶことをあげており、「史書を読まざれば、則ち従りて其の国家を愛すること無く、史有るも読まざるは是に国家の根本先ず抜かれる」（『民報』一九〇六年第六号）と看破しているのである。劉師培は「論古学出于史官」（『国粹学报』一九〇五年第一期）で、「史なるものは一代の学を掌するものなり。一代の学は即ち一国の政教の本にして、一代の王者の開くところなり」「史は一代の盛衰の係はるところ、一代學術の総帰するところなり」という。一方、鄭実（『国学徴論』（『国粹学报』一九〇五年第二期）で、「史なければ則ち学なし。学なければ則ち何をもってか国有らん」という。彼らにとって「国粹」の具体化としての「国学」は史学にはかな

らなかった。

史学を学術の中で最も高い地位に置くという彼らの史学へのこだわりの背景には六経皆史説の影響があるが、同時に、彼らは民族主義の根柢としての民族的伝統、即ち、自民族の歴史を問題としたのである。なぜなら満州族王朝の支配と帝国主義列強の圧力の下において彼らの思想形成がなされたゆえに、自らの民族的伝統こそ彼らの精神的拠り所であったからである。それゆえに反満州意識を高めるべく、『春秋』研究をもって華夷の弁別につとめ、宋明の元清への抵抗を顕賞した。ただ、それは大漢民族主義といった狭隘性をもつものでもあった。

彼らは明末清初の顧炎武・黄宗羲らの自らの民族的伝統に則った経世致用の学を援用すると同時に西欧の進化論や社会学、歴史学の理論・方法をも学んでいた。西欧の史学理論からの影響が大きかったが、西欧が中国を侵略する主体であることも事実であって、それに対する懐疑の念も強く意識されていたのである。章炳麟は「某君与某論樸学報書」（『国粹学報』一九〇六年第二三期撰録）で「中西学術は本より通塗するもの無し。適ま会合するもの有るも亦、莊周の所謂射者前に期するに非ずして中るなり。今乃ち泰西を引きて以て経説を徵するは寧ろ宋人の禅学を以て経を説くに異ならんや」と述べて、西欧近代の学術を安易に援用することを戒めているのである。

「国粹学報発刊辞」（『国粹学報』一九〇五年第一期）には、「西学を藉りて中学を証明す」とあり、「西学」と「中学」を組上に乗せているが、これは中体西用論的視点を意味するのであろうか。許守微の「論国粹無祖于欧化」（『国粹学報』一九〇五年第七期）には「国粹は精神の学なり。欧化は形質の学なり。（欧化も亦精神の学有り。此就ち大端の言のみ）形質無ければ則ち精神何を以て存せん。精神無ければ則ち形質何を以て立たん」とあり、明らかに嚴復らの変法思想と重なりあう地平にあったことが了解されるが、彼らは二〇世紀初頭の欧化への傾斜に対する批判の立場から中国の歴史・伝統をもって自らの民族的アイデンティティを求めたことは間違いない。許守微は

更に「国粹は道德の源泉なり、功業の帰墟なり、文章の靈奥なり。一言以て之を蔽へば、国粹なるものは欧化を助けて愈彰らかにして欧化に敵し以て自ら防ぐに非ず」とも述べている。これは彼らが西欧近代の学問を尊重しつつも、「国粹」こそ学を中心にはかならないことを述べているものである。また、鄧実の「国学無用辨」(『国粹学報』一九〇七年第三〇期)では、明末の顧炎武の「郷治の説行われて神州地方自治の制早成し」、黄宗羲の「原君原臣の説昌んにして則ち専制の局早破し」、王船山の「愛類辨族の説著れて則ち民族独立の国久しく已に東方に建つ」と述べて、西欧近代思想と同質のものを中国の伝統思想に見出す視点があるが、それを付会説とみなすことができるのだろうか。むしろ、伝統文化を再編しようとする民族主義的視点をこそ見出すべきであろう。

彼らは従来の史学をどのように批判したのだろうか。例えば、鄧実は「国学真論」(『国粹学報』一九〇七年第二七期)で「吾神州の學術は秦漢より以來、一に君学の天下のみ。所謂国無ければ所謂一国の学無し。何ぞや。君有りて国有るを知らず」と述べて、「君学」を批判している。また、「国学無用辨」(『国粹学報』一九〇七年第三〇期)で「君学を盛行せしめ、国学を不振ならしめたるは、吾民も亦与に過ち有り」として、「君学」を排除するために知識人のみならず、民衆もそれに参画すべきを述べている。これは梁啓超の旧史学批判とほぼ同様な視点であるが、彼ほどには激烈な批判ではないのであって、彼は二十四史を「二十四姓の家譜」とみなしたのに対して、国粹派の人々はそこまで偏った解釈はしなかったのである。鄧実は「史学通論」(『光緒壬寅(廿八年) 政芸叢書』)で神権時代・君権時代・民権時代といった時代区分を行った際、歴史発展を提出すると同時に、「神権を以て君権を監す」る側面を評価している。黄節や章炳麟も梁啓超の「二十四姓の家譜」として二十四史をみなす見解には否定的であつた。それゆえ、総じて彼ら国粹派の人々は旧史学を全面的に否定する論法には与しなかったのである。

彼らは当然のこととして歴史叙述のありかたについて模索した。章炳麟は「中国通史略例」「中国通史目錄」な

どにおいて通史の重要性を強調しつつも伝統的紀伝体にこだわる見解を示したが、劉師培は西欧の時代区分の形式をよしとし、『中国歴史大略』『中国歴史教科書』で時代区分を行った。紀年問題に関して、梁啓超は改良派の立場たる孔子紀年を提唱していたが、劉師培は『攘書』で「宜しく西国紀年の例に倣ひて、黃帝降生を以て紀年と為す」として、その後、これが革命派に広くゆきわたったのである。また、地方史の編纂に関して、例えば、劉師培は「編輯郷土志序例」(『国粹学報』一九〇六年第九期・一二期)で、地方史を民衆史の一端を担うものとみなし、とりわけ風俗史を重視したが、地方史の編纂を通じて変革意識を高めることを目的としたのである。また、地方史を郷土教材として活用することも重視した。例えば、劉師培は『江蘇郷土歴史教科書』を著し、それによって愛國愛郷の精神を培い、地方の政治・経済・文化事業の参考に供しようとしたのである。劉師培は更に「勸各省州縣編輯書籍志序」(『国粹学報』一九〇六年第一八期)で各省州縣が編集した旧籍を保存することを提唱し、「論中国宜建藏書樓」(『国粹学報』一九〇六年第一九期)では、各地に図書館を創設することを提案したのである。彼らは經世致用の学としての史学を明末清初の思想家から学び、かつ排滿革命の理論と連動しつつ、歴史解説を行ったのである。その内容は種族の弁別であり、清朝の腐敗を明らかにすることであり、民族の氣節を表彰することであった。また、改良派を批判して革命の正当性を論証するために、歴史の經驗を總括して革命戰略を創造することにも言及した。例えば、太平天国運動や義和團運動の教訓を引き出したり、革命運動に殉じた人々を顕賞するなど、彼らの史学研究は極めて政治的実践的課題と連動しつつ展開したことが了解される。

こうしてみると、国粹主義をうちだした革命派の知識人にあつては、日本を媒介として導入された西欧近代史学を以て伝統史学を全否定してゆこうとした梁啓超とは異なり、伝統史学との相互浸透というべきか、入り込み方が深いのであつて、清朝崩壊後には「君学」批判の視点を喪失し、中華民国成立後の動向と絡んで政治的に保守化し

ていったということは伝統史学の重みの受け止め方の違いにもあったのである。尚、李喜所「略論辛亥革命時期的国粹主義思潮」²⁰では、孫文の三民主義と比較した場合、国粹派は概して民権主義や民生主義に対しては「冷淡」であり、「二民主義」であつたとみなしている。また、その学説は西欧の学術に対して付会説が行われていることを指摘して、その保守性を指摘する。総体として国粹派を捉えるならば、そのような事実が指摘できようが、それは政治的視点からの国粹派分析にすぎまい。孫文のように欧米近代の政治思想を直接的に吸収できた人物と伝統に泥んだ知識人たる国粹派の人々は排滿革命に自らの政治的立場を明らかにしていたが、伝統に泥んだ分、二〇世紀初頭にあつて三民主義のもつ広がりを理解できなかったのである。

四 日本における国粹主義と中国における国粹主義の交錯

日本の近代思想史の分野では明治末年の「国粹」問題はどのように捉えられているのであろうか。国粹主義の登場、それは自由民権運動がほぼ終焉して帝国憲法の公布と帝国議会の開設に向かいつつあつた明治国家体制完成の時代にあたる。一八八八年に政教社が設立されて『日本人』が創刊され、新聞『東京電報』が創刊され、更に翌年には『東京電報』の廃刊と同時に新聞『日本』が創刊されることによつて国粹主義が登場する。

政教社の国粹主義の登場について松本三之介の説に従つて論じておくならば、当時の日本の国粹主義は一八八四年から一八八七年にかけての欧化主義の風潮に対する「憂慮と反発」²¹の表出であり、「やがては日本の民族的な自覚や文化的独自性も回復不能の事態に立ち至るのではないかとの深い危機感に支えられた人たちの集団として」²²彼らは登場した。本山幸彦によるならば、それは一九世紀後半における欧州ナショナリズムの刺激を受け、「啓蒙主

義よりもその批判者である歴史主義や浪漫主義と結びつき、いちじるしく個性的な価値や個性的な活動を重視する。しかし、彼らは日本の国粹だけを絶対視したのではなく、世界の各民族がそれぞれ国粹を発揮することによって、人類の文化が真に豊かになることを期待していた⁽²³⁾ということになる。国粹主義は日清戦争が勃発する前夜には開戦論を喚起する世論形成に一役買ったことは事実ではあるが、後年の日本の国家主義とは似て非なるものであった。雑誌『日本人』の主筆であった志賀重昂のいう「国粹」とは「日本を取り巻く地理・風土・景観、あるいは習慣・歴史などをおして日本の民族の中に血肉化されたところの国民性を指す観念⁽²⁴⁾」とされた。それゆえこの観念は「日本という国土に住む民族の長い歴史をおして刻まれた生活の年輪とでも言うべき包括的な――したがって単に政治的のみならず同時に地理的・経済的・文化的な⁽²⁵⁾」観念であったということである。しかもこの国粹主義は「民族の独善的・閉鎖的な自己主張に陥ることなく、むしろ世界に向かって開かれた健康なナショナリズムとしての性格を具えていた⁽²⁶⁾」のであり、「異なつた民族や異質の文化に対して頑な拒否反応に走る傾向からは比較的自由であつた⁽²⁷⁾」のである。また、新聞『日本』の論客であつた陸羯南のいう「国粹」は「国民主義」と呼ばれたが、「排外的・独善的な国家主義に陥ることなく、健全な批判精神と西欧文明に対する正しい理解とに支えられた健康なナショナリズムとしての性格を内包していた⁽²⁸⁾」という。同様に、三宅雪嶺の「国粹」とは「世界文明の一翼を担い得るもの⁽²⁹⁾」であつた。日本の国粹主義が後年に政治的には国家主義的傾向を増幅させて日本帝国主義の侵略を擁護・補完する思想運動へと傾斜していったことは周知のことである。しかし、一八八〇から一八九〇年代に至る時期の国粹主義がそのようなものと同じ視される状況ではなかつた。むしろ「文化的ナショナリズム⁽³⁰⁾」と命名されるような思想的立場にあつたことが了解されよう。

さて、中国における「国粹主義」なる言葉は日本から伝播した言葉であつた。一八八八年、政教社が創設されて

国粹主義を提唱したことに由来することは既に言及した。それが中国では他民族による侵略という民族的危機を意識化する中で展開したものであったことは既に指摘した。日本における国粹主義をめぐる観念と比較した場合、それは一面、中国の思想状況の中で問題となった観念と変わらぬ内容をもつものの、内実は異なるものだった。なぜなら、一面、欧化と国粹の問題を拮抗させる点では同じ位相をもつように見えるが、内実は日本の政府主導の欧化に対する批判勢力としての国粹主義と中国の革命派知識人の国粹主義との違いである。既に封建から近代への政治変革を遂げて帝国主義国家へと変貌しつつあった国家体制への楔を打ち込もうとする集団と対外的危機を抱えながら異民族王朝体制の転覆を志向する集団とではおよそ異なる現前の政治・思想状況があった。中国の国粹主義を論じた革命派の知識人は政治的目的としてのみならず、文化的観点からも国粹を論じ、彼らの国粹論議が中国の新しい文化状況を創造していった。既に述べたように黄節の「国粹学社發起辞」（『政芸通報』一九〇四年第一号）では「日本の国粹を言うは政論を争うに与かり、吾国の国粹を言うは科学を争うに与かる」として、中国独自の国粹論を政治ではなく、文化の問題、科学の問題として提示した。「国粹は日本の名辞なり。吾が国之を言う、その名辞は已に国粹に非ざるなり。名は主人に従い、物は中国に従う、吾其の義を取りて云うこと有り」も同様な視点からのものである。そこには共有すべきものと同時に異質なものが提示されているのであるが、しかし、日本の国粹主義は国権論へと傾斜し、中国の国粹主義は伝統回帰へと収斂していったのも、また事実である。そこには両国の政治的思想的状況の違いが厳然と存在していたということである。

ところで、日本の当時の国粹主義者の中から内藤湖南のような中国史家が誕生していったというのも一つの因縁であろう。内藤湖南は政治を下劣と見なす観点からジャーナリズムと訣別して中国史家へと自己展開していったのであるが、それが政教社同人として三宅雪嶺の下でその筆力を研ぎつつ展開した言論活動を通じて獲得されたもの

であることは松本三之介も指摘している。即ち「文学、美術、宗教、史学等」に重点をおく方向であり、もう一つは西欧文明への心酔を脱却して国民固有の歴史と伝統の尊重へと進むこと」が内藤湖南の理想であったというのである。そして松本は内藤湖南の中国観が当時にあつては「中国を守旧の代表とし、日本を東洋進歩の先鞭と見な」す大方の見方に対して「中国の変革・進歩は何よりも中国の自主性にまつべきである」としたとして、その後の学術研究が所謂支那通とは異なる地点に立っていた、とする。

確かに、増淵龍夫も指摘するように、内藤湖南の中国史研究が従来の漢学者流の狹隘さを批判して清朝考証学の水準を高く評価し、その水準に迫ろうと努力した結果、「中国の近代化を、その歴史的潜流の中に求める点において、はるかに内在的な歴史理解」に到達したのである。彼にとつては清末の中国そのものへの関心が強く働いていたのであつて、「そこにおける現実的関心は、日本の存立にかけての大陸進出であり、それとの関連における『支那問題』であつた」のであり、「この激動する中国の現状を、中国の歴史の中で、その歴史の一として、数千年來の中国の歴史を通じてその底に見られる大きな力強い流れ、その流れの押し進んで行く一定の方向との関連において、理解しようとした」のである。しかしながら、増淵龍夫は「宋以降の歴史的潜流が、ヨーロッパ文化と接触し或いは激突するところに湖南の直面した『現代中国』の諸問題が発生した」と述べて、内藤湖南が中国史の中に西欧との類似性を発掘しようとする視点の問題性を指摘し、中国の改革者たちが取り組んだ西欧的近代の否定的媒介の上に構築されたものとは異なるものである、とする。その点で、彼においては国粹主義者に見られる東西融合論に立った中国史理解であつたのである。J・A・フォーゲルは内藤湖南が一八九〇年代の「文化的ナシヨナリスト」の影響下に自己形成したがゆえに、「中国が思うように近代化を進めてはいないと知つても、湖南は決して中国を拒絶しなかつた。それほどまでにかれは東アジアが共有する文化的伝統にみずからのアイデンティティーを

見出していた⁽³⁸⁾」と日中の齟齬よりも湖南の思い入れに加担している。このような視点はあくまで内藤湖南の足跡にそって思想的立場を考察しようとするがゆえのものであるが、二〇世紀中国のナショナリズムを認知しえなかった内藤湖南の問題性にまで入り込もうとする時、やはり増淵龍夫の指摘は避けて通れないのである。

後年の内藤湖南の著作には中国に代わって中国の将来を見通そうとする帝国主義者の傲慢さが表出してきたのも事実である。例えば子安宣邦は一九一四年出版の『支那論』が京都学派の支那学成立と『支那人に代わって支那の為に考』⁽³⁹⁾ えるという中国への超越的な視点が、いかに相関するものであるか⁽⁴⁰⁾を考察する。子安はここで内藤湖南の中国像が「停滞する老大国」のイメージであり、「いち早く近代国家を形成し、欧米帝国主義国家の仲間入りをした日本の帝国主義的な中国経営の立場に」⁽⁴¹⁾立ったがゆえのものであった、とする。「自己自身との対自的な関係をもとうとしない、あるいはもつことに常に挫折する重く暗い情性のうちに持続する即自的な存在としての中国像」⁽⁴²⁾が内藤湖南の中国像であったというのである。しかし、内藤湖南の思想的立場と彼を取り巻く帝国主義化しつつあった日本近代の歴史状況を絡ませ、帝国主義的知識人の類例であったと結論することはたやすいのである。しかも、『支那論』や『新支那論』を書いた十年の幅を等閑視することは問題であろう。子安の論は初めに結論ありきの感を免れないのである。

内藤湖南は中国の史学論に関して深い関心をもち、一九〇七年（明治四〇）に京都大学に就職して間もなく、史学史の構想を打ち立て、史学史研究にもそのエネルギーを傾注したことは周知のことである。そこでは当時の中国の史学論と深く関わりつつ自説を展開したと思われるが、彼の史学史には清代、即ち一九世紀末頃までに關しては言及があるが、同時代の著作に關してはストリートには言及されてはいない。彼は康有為・章炳麟らの政治・學術論に關して言及することはあつても、その史学論に關しては充分な論断はしていない。例えば、『時事論』の「支那

時局と新旧思想⁽⁴³⁾」では、康有為の孔子教や章炳麟の諸子評価等を取り上げ、「孔子尊信の念、学者、識者の間に薄らぎ居るは事実と相違なけれども、支那全般に渉りての大體の思想は孔子の信念を擺脫し能はざるものなくばあら⁽⁴⁴⁾ず」として中国全体の伝統性から目前の中国思想を分析している。そして、「維新当時西洋文明の新知識新思想の吸収に熱中し、さながら原を燦くの勢を以て旧物破壊これ事としたる我が日本帝国は如何なりしか。二十年頃に至り、之が反動起り、日本主義、国粹保存の声を高め来り、其の教育上に及ぼしたる結果、東洋倫理思想の復活とも見るべき教育勅語あり、家族制度、敬神愛国の説愈盛なる事とはなれり」と述べて、日本と比較して中国においても一度共和革命が進行したとしても、その反動としての孔子教の動きが必然的に起こるであろうと予測している。内藤湖南にあつては日本の思想現実への注視から欧化と国粹のアンビバレンツなところを踏まえた分析がなされているのである。

註

(1) (28) 『响沫集』九、一九九六年。

(2) 尹達主編『中国史学發展史』(中州古籍出版社、一九八五年、鄭州)、馬金科・洪金陵編著『中国近代史学發展叙論』(中国人民大学出版社、一九九四年、北京)、張豈之主編『中国近代史学學術史』(中国社会科学出版社、一九九六年、北京)など。

(3) (6) (7) 大久保利謙『日本近代史学の成立』(吉川弘文館、一九八八年)。

(4) (5) (8) (9) 宮地正人「幕末・明治前期における歴史認識の構造」『歴史認識』(日本近代思想大系一三、岩波書店、一九九一年)。

(10) 兪旦初の『愛国主義与中国近代史学』によれば、南洋公学訳書院版と『学部官報』は英文から翻訳された

ものであるという。

- (11)(12) 「梁啓超と史界革命」(『日本中国学会報』第二八集、一九七六年)。
- (13) 狭間直樹編『共同研究 梁啓超』(みすず書房、一九九九年)。
- (14) 丁文江撰『梁啓超公年譜長編』(上海人民出版社、一九八三年、上海)。
- (15) 例えば、胡逢祥・張文建『中国近代史学思想与流派』(華東師範大学出版社、一九九一年、上海)。
- (16) 湯志鈞編『章太炎年譜長編』上(中華書局、一九七九年、北京)。
- (17)(20) 胡偉希編『辛亥革命与中国近代思想文化』(中国人民大学出版社、一九九一年、北京)。
- (18) 鄭師渠『晚清国粹派』(北京師範大学出版社、一九九三年、北京)。
- (19) 佐藤豊『「国粹学報」誌上に於ける「国粹」と「国学」の成立』(『日本中国学会報』第三四集、一九八二年)。
- (21)(22)(24)(25)(26)(27)(28)(29)(30)(31)(32)(33) 松本三之介『明治思想における伝統と近代』(東京大学出版会、一九九六年)。
- (23) 本山幸彦『国粹主義』(『近代の思想』一へ日本思想史講座六)雄山閣、一九七六年)。
- (35)(36) 増淵龍夫『日本の近代史学史における中国

と日本―内藤湖南の場合―」(同『歴史家の同時代史的考察について』岩波書店、一九八三年)。

(37)(38) J・A・フォーゲル『内藤湖南ポリティックスとシノロジー』(平凡社、一九八九年)。

(39)(40)(41)(42) 子安宣邦『近代知と中国認識』(同『近代知のアルケオロジー』岩波書店、一九九六年)

(43)(44) 「京都教育」第二三四号、一九一一年一二月(『内藤湖南全集』第四巻)。

付記

脱稿後、村田雄二郎「近代中国における『国民』の誕生」(国分良成・藤原帰一・林振江編『グローバル化した中国はどうなるか』新書館、二〇〇〇年)、竹内弘行「梁啓超の歴史観と進化思想」(同『中国の儒教的近代化論』研文出版、一九九五年)を知ったが、これらの論考を生かすことができなかった。

Nationalism and Modern Historical Studies at the Time of the Xinhai Revolution

Tetsumasa KAWAKAMI

The object of this study is a consciousness and recognition of history held by revolutionary intellectuals who developed nationalistic thoughts during the Xinhai Revolution.

At the begining of the 20th century, Liang Qi Chao 梁啓超, a leader of a reformist group, developed a new type of modern historical studies of China. He was deeply influenced by Japanese modern historians, who were inclined to philosophy of enlightenment and positivism. Modern historical studies in Japan and China developed through influencing mutually.

Besides Zhang Bing Lin 章炳麟 and other revolutionary intellectuals established a school of historical studies based on the nationalism of their own, which was at once influenced by the nationalism of Japan. The consciousness of history are different from history of enlightenment and culturalism as such. The former aimed at overthrowing the Qin Empire.

Meanwhile in Japan, nationalism developed as a cultural movement in the 1880s and 1890s, and it was during this period that Naito Konan 内藤湖南, a Japanese historian, constructed his own view of China's historical development. This paper referred to his thought as well.